

## 劔岳 点の記(2)

茗溪塾塾長 宇野 雅春

昨年の7月に新田次郎の「劔岳 点の記」を読んで、教務便りに思わず感想を書きました。日本アルプスの唯一自分が登った山として関心が高かったのと、その山が明治40年ごろまでは、人が登れない前人未踏の山であったということが、小説を読んだときの最初の驚きでした。実際劔岳に登ったときは、山頂直前の難所「カニのたてばい」といわれる長い鎖場で、垂直の石壁を登りながら、「恐怖心」を持ったことが思い出されます。夏のシーズンということもあって、石壁に人がジュツつなぎに並んでいて、引き返すことも出来ない状況。下は見ないようにしてじわじわと登っていきます。何しろ20年以上も前の話なので、あまりはっきりとは覚えていなかったのですが、今年は映画が公開され、TVでも劔岳が特集され某チャンネルでの特集番組を見ていてその時の記憶がよみがえりました。登っている崖の上の方から小さな石が上から落ちてくることもあり、「落石！」とさけぶ声（山では義務）や、すぐ近くから聞こえてくる…たぶん親が背中にくくりつけているであろう小さな子どもの泣き声などに、尚いっそう恐怖心を駆り立てられていました。頂上についたときの安堵感と眼前に広がった風景は、未だかつて経験したことのない素晴らしいものだったと思います。が、気が付いたときいつ落としたのか？腕時計を紛失してしまっていて、その景色を十分楽しめなかった記憶もあります。一般のコースでもそんな調子でしたから、その4泊5日の行程の最中にも、遭難とか滑落というニュースがあったように思います。「カニのたてばい」（カニが岩にへばりつきながらまっすぐ前に登っていく）などは、今でこそ鎖がたくさん打ち付けてありますが、明治時代の山の装備では登ることが本当に不可能に近いことだったのだと思います。下りの「カニのヨコバイ」とか、頂上を極めた感動よりも、急勾配をやっとのことで、降りてしまったときの安堵感の方が記憶に強く残っていますから、さぞかし緊張の連続であったのだろうと思います。

陸軍の陸地測量部が「軍の威信にかけて、死を賭してでも初登頂せよ」というくだりから、最後山頂で見つかった昔の修行者の遺品から、「初登頂でなければ、価値なし」と無視されてしまうあたりが、映画でも分かりやすく描かれていました。対抗して敗北した日本山岳会が唯一その功績をたたえたというあたりも、映画では強調されていました。日本地図の最後の空白点が明らかになるという歴史的意義も当然ながら、この物語は、一人一人が全く違う立場にしながら、いつの間にかその山頂に上るという1つの目的に命を賭けて向かっていくということに大きなテーマがあるように思います。そのためにかなりの危険も犯すこととなります。失敗を反省しつつ、リーダーは部下を気遣い、部下は上司を気遣いながら、何度も引き返しながら、じわじわと山頂に近づいていきます。「あきらめない！」ということも多分重要な要素です。考えていることと、実践することの違いが明確に見えてきます。考えているだけでは進展はないのです。最初は柴崎芳太郎が危険と思われていた雪渓を一気に頂上近くまで突き進む決断をします。生田は上ろうとして滑落…そして最後は宇治長次郎が、「決断」をします。思った通りにはなかなか行かないのですが、危険も省みず岩をよじ登ります。その決断が、不可能と思われていた登頂を成功に導くことになるのです。そしてついに頂上を極めます。道を作る最初はやはり、どこかで「決断」をしなければならぬということなのかもしれません。映画では標石を持ち上げることが出来ず四等三角点しか作れないあたりも描かれています。三等三角点が設置されたのが、つい最近の2004年のことといますから100年前の陸地測量部の偉業を改めて思います。2004年に劔岳は正式に2997mとされました。

受験は良く山登りに例えられます。自分が無理だと思ってしまうと多分何事もなしえないのです。映画をみて思ったことは自分の任務をひたすら全うしようとしている地道で辛い仕事に耐えているうちに、目標が逆に見えてくるということです。そして、そこに同じ目的を持つ仲間が来てくるということ。そのことの大切さと幸福を物語っているように思われます。受験もこれから正念場の夏が始まります。考えているより、実行、実行する中から何をすればよいのかはおのずから見えてくる…映画劔岳「点の記」は改めてそんなことを考えさせてくれました。